【土木史研究　第13号　1993年6月】

土木史研究レビュー

河　　川

石　崎　正　和

はじめに

土木史における河川分野は、その対象が極めて広い。そこで、レビューにあたって、第１回から第12回までの研究論文を便宜上、①洪水・水害、②河道変遷、③水防、④伝統的河川水利工法、⑤河川処理思想・計画・技術（近世）、⑥河川処理思想・計画・技術（近代・現代）、⑦河川処理（地域開発）、⑧河川処理（都市整備）、⑨河川処理（港湾整備）、⑩河川舟運、⑪灌漑排水・農地開発、⑫河川水力発電、⑬その他に区分した。ただし、全ての論文をこれらの区分に分類することはやや無理があるかもしれない。ここで河川処理という区分を用いているが、河川事業を歴史的に見ると、治水あるいは利水といった単一の目的で行われた事例は少ないと思われることから、多様な河川事業を総称して河川処理として扱うこととした。また、⑦～⑨は河川処理でもその内容が地域開発、都市整備、港湾整備にそれぞれ比較的関連すると思われる論文を区分するためである。なお、上下水道に関連する論文は、河川との関係が見られても、都市水利の分野でレビューされるものと思われ、ここでは取り上げていない。また、土木史研究の掲載論文を概観しているが、補足的に掲載論文以外の研究についても触れている。

１．洪水・水害

繰り返し発生する洪水よって氾濫が起っても、人間の営みに影響を及ぼさなければ水害にはならない。つまり氾濫地域が水田や宅地などに開発され、氾濫による被害が発生してはじめて水害が意識されることになる。しかし、人間の営みがあっても、洪水に対応した暮らしがなされていれば、被害を軽減することは可能である。したがって、水害は、豪雨などが自然的与件となるが、社会的要因の強い現象といえる。この洪水と水害の相違について、「河川には自然史と社会史がある。洪水は河川の自然史のひと齣であり、水害は社会史のひと齣である」と明快に表現したのは小出博（「日本の河川」東京大学出版会、1970）であった。

このような社会的要因の強い現象としての水害については、高橋裕、安藤義久らは、台地部中小河川である神田川における水害の履歴から都市化による土地利用の変化と水害特性との関係、水害特性への影響要因について歴史的に考察している。

わが国の治水計画は、大河川において100～200年に１回程度生起する規模の洪水を対象としているが、水文観測期間は短いため、治水計画の策定にあたっては、可能な限り過去の洪水流量データを収集することが重要である。河川計画において水文考古が重視されている中国では、数多くの歴史的な水位記録の収集、整理、分析が行われているが、わが国では歴史的な水位記録は限られている。したがって、歴史洪水の復元などの研究も乏しいが、土木史研究においては、山田啓一、田辺淳、片桐剛による千曲川における既往最大洪水である寛保２年（1742）８月洪水を対象とした歴史洪水の研究では、災害記録による被害分析や洪水痕跡から洪水規模や氾濫量を推定するとともに、洪水位縦断面曲線を基に等流計算を行い最大流量を推定している。寒川典昭、山下伊千造、南志郎は、同様に寛保２年８月洪水を含む千曲川下流の歴史洪水について、マニング式における流積、径深、動水勾配、粗度係数を推定し、河道部と氾濫原とに区分して最大流量を推定している。これら千曲川における歴史洪水の復元においては、山田らと寒川らでは、異なる手法が用いられ

ているが、いずれも興味深い復元手法が提示されている。品川守、山田正、豊田康嗣は、石狩川の明治37年7月洪水における水位観測に基づいて岡崎文吉が算定した洪水量の算出方法を検証するとともに、現代的な手法による再現計算を行い、岡崎文吉による洪水流量の算定が妥当であることを示している。

2．河道変遷

河道の変遷については、歴史学あるいは地理学の分野において、数多くの研究が見られ、利根川東遷をはじめ、その変遷の経緯や目的及び結果について、しばしば論議されてきた。例えば、利根川東遷においては、これまで江戸の水害防止、伊達藩に対する防備、利根川・鬼怒川水系を結ぶ舟運路の拡大、埼玉平野の開発など、様々な目的が提示されてきたが、この利根川東遷における従来の定説に疑問を投げかけたのは小出博（「利根川と淀川」中公新書、1975）であり、その後、大熊孝（「利根川治水の変遷と水害」東京大学出版会、1981）などが土木史の観点から利根川東遷を歴史的に検証している。

このように河道の変遷は、それが自然的な要因であれ、人為的な要因であれ、その後の河川処理あるいは国土開発の方向を考える上で、極めて重要な研究対象である。土木史研究においては、外川忠利、大熊孝が信濃川下流部について、中川武夫は手取川について、ともに従来の河道変遷の考え方に関して、改めて考察を加えている。

3．水防

今日のように河川管理者による治水事業が実施される以前から、水害被害を軽減するための地先住民による水防活動が行われてきた。また洪水氾濫が想定される場合には、輪中地帯をはじめ常習的な氾濫地域における水屋・水塚や大井川下流の舟型屋敷あるいは屋敷林などのように、当然のことながら水害を回避するため、建造物の立地が検討され、浸水被害を軽減する工夫がなされてきた。

風間輝雄は、江戸時代から現代までを3期に区分して、利根川、信濃川、大井川、木曽川などの事例を考察し、水防組織の成立とその変遷及び水防活動の態勢について一連の研究を行っている。また洪水氾濫と建造物との関係について、興味深い研究がなされている。松浦茂樹は、宇治平等院が宇治川の氾濫に備えた建造物であったと指摘している。公共施設における水防に事例としては、小出崇が河川近傍に立地する水戸市及び足利市の浄水場における水害を考慮した施設構造と水防活動について報告している。

4．伝統的河川水利工法

伝統的河川水利工法とは、治水・利水の長い歴史の中で考案されてきた多種多様な河川・水利工法（技術）を総称するものであり、例えば、堤防でいえば雁行状の不連続な堤防である霞堤や本堤の決壊などに対応した控堤、洪水氾濫流のエネルギーを減殺するとともに石礫などの流送物の堆積を促す水害防備林、堤防の決壊等を防ぐための月の輪や木流しなどの水防工法、取水施設としての杭堰や斜め堰、あるいは木工沈床・粗朶沈床・蛇籠などで築かれた堰、さらには漁業における築や魚付き林なども伝統的河川工法に含めることができる。こうした伝統的河川工法は、その考案された時代や地域性を反映して、それぞれに限られた材料を駆使し、適用される河川特性などに応じて創意工夫がこらされてきたものであり、コンクリートや鉄などの近代的な施工資材が得られる以前に考案された様々な工法が含まれる。なお、近年河川計画あるいは河川の自然復元の視点から、伝統的河川工法が再評価されているが、それらが工夫、考案、適用された背景や条件にも注目する必要があると同時に、それぞれの時代の河川処理の考え方をも理解することが重要である。

こうした伝統工法のうち、松浦茂樹、山本晃一、浜口達男、本間久枝は、水害防備林の変遷とその効果を評価している。さらに石崎正和は、中国の事例を紹介しながら蛇籠の起源とその変遷を明らかにし、大熊孝は、霞堤の語源を明らかにするとともに、その機能から急流型と緩流型とに区別すべきことを指摘し、超過洪水対策としての霞堤の現代的な意義に触れている。

伝統工法は、明治以降西欧近代技術の積極的な導入とコンクリートや鉄などの近代的な施工資材が使用されるに及んで、次第に顧みられなくなったものが多いが、明治期においてもわが国の在来技術の発展がみられることを、石崎正和は、安積疏水における技能集団児島組の活躍、服部長七が考案した人造石工法、千葉県の上総丘陵河川において登場した板羽目堰、藤原式水車などを事例に考察している。また石田正治は、愛知県と岐阜県において今日なお人造石工法による水利構造物が産業遺跡として残存している状況を報告し、その保存の必要性を論じている。

5．河川処理思想・計画・技術（近世）

治水・利水といった河川処理は、それぞれの時代における社会的要請のもとで行われてきた。しかしながら、今日河川処理の目的やその経緯あるいは技術的・計画的な思想が必ずしも明確ではない場合が多い。したがって、主に歴史資料による文献的な検討を中心とした研究が行われている。こうした研究の視点は、主として、近世においていかなる思想あるいは考え方により、どのような計画に基づき、あるいはどのような技術を採用して、河川処理を行ってきたかを明らかにすることである。その背景には、過去の河川処理思想・計画・技術への評価を通じて、現代における河川処理のあり方を模索しよという姿勢を見ることができる。

澤田健吉による一連の研究は、吉野川の治水に関する古文書、古絵図、新聞記事などを丹念に吟味、検討した貴重な業績であるといえる。石崎正和は、農業史や農業経済史などの分野において収集されてきた農書や地方書に記述されている護岸、水制、築堤などの河川水利技術に着目し、その内容を比較検討するとともに、近世における河川観や技術思想の変遷について考察している。同様に知野泰明、大熊孝、石崎正和は、近世文書に見る河川堤防の変遷に関して研究するとともに、近世河川処理技術の二大流派といわれる関東流と紀州流に関する一般的な認識を再検討している。さらに知野泰明は、酒匂川の文命堤を事例とした近世治水技術思想の特徴について研究しているほか、徳川幕府法令と近世治水史料から治水技術の実態と変遷について研究している。また堀野一男は、秋田藩における近世文書及び「堤防溝洫志」のに示された治水・利水技術とその思想について一連の考察を行っている。

6．河川処理思想・計画・技術（近代・現代）

明治期に至りオランダを中心とするお雇い外国人らによる西欧近代技術が導入されるとともに、欧米留学による河川技術者が養成され、さらに明治中期以降にはいわゆる低水工事から高水工事への転換が図られたといわれる。しかし、一方では、西師意、尾高惇忠などの民間人による治水論議が登場している。こうした時代を経て、わが国の河川処理思想・計画・技術が発展したが、その内容あるいは経緯については、必ずしも明らかではない。したがって、土木史研究においても、明治期を中心とした研究が幾つかなされている。

石崎正和、宮村忠は、近世における治水論との比較し、明治前期おける民間治水論の特徴について考察している。松浦茂樹、山本晃一は、明治29年２月発表の斐伊川改修計画を事例として近代黎明期における河川改修計画について考察している。また山村悦夫は、岡崎文吉による初期の石狩川治水計画における治水自然主義論について考察しており、また許士達広、品川守、久米洋三は、同様に岡崎文吉の石狩川治水の理想とした自然主義について、その背景と今日的意義に関する考察を行っている。一方、お雇い外国人に関連する研究としては、知野泰明、大熊孝が、大河津分水計画を批判したブラントンの信濃川河口調査に関する評価を行っており、石崎正和は、お雇い外国人による西欧近代技術の導入経緯と背景及びわが国における対応について考察している。

その後については、松浦茂樹が、戦前の河水統制事業とその社会的背景、治水長期計画の策定の経緯とその基本的考え方の変遷、戦前の鴨川改修計画における環境面の配慮など、河川改修計画の考え方に関する研究を行っている。

7．河川処理（地域開発）

河川改修や利水開発などの河川処理は、単に洪水防御や灌漑といった観点に留まらず、地域開発としての性格が強い。したがって、土木史研究においても、河川処理の目的や効果、その影響について、地域開発との関連で研究した成果が見られる。

福成孝三、石黒勲は、児島湾北部の新田開発における治水利水計画について歴史的に考察している。大熊孝は、信濃川の大河津分水と阿賀野川の満願寺水門について、それぞれの新潟平野の開発に果たした役割を考察している。また望月達也、小川淳一、鈴木栄は、大河津分水の変遷を考察し、現状における機能的・構造的な課題について指摘している。高橋彌は、雁堤による富士川治水が地域発展と社会経済に果たした役割について考察している。松浦茂樹は、古代から家康入国まで埼玉平野における水田開発と舟運について検討し、既に大規模古墳群である埼玉古墳群を成立させるほど、生産基盤の整備が進んでいたことを指摘している。そのほか、山本廣次、眞下実による木曽三川と輪中、根橋直人による宝暦治水、山本廣次による豊川、中川武夫による梯川、小林寿朗による中川など、それぞれ河川処理の歴史的変遷を考察している。

8．河川処理（都市整備）

都市における河川・運河は、用水供給、雨水・下水排水路、交通運輸路、親水空間、あるいは文化空間など、多様な役割を有していた。そうした役割は、都市形成と発展に伴って変容し、あるいは埋立てなどにより道路や公園などの都市施設として姿を変えてしまったものもある。しかし近年、河川・運河は都市環境整備における貴重な水辺空間を提供し、そこに残存する歴史的構造物として保存や再生の対象ともなっている。

昌子住江は、東京都心部の河川・運河について、震災・戦災復興事業などにおけるその処理について一連の考察を行っている。中川武夫、川本憲夫、古池久、石田郁喜は、金沢城周辺の河川、堀、用水について、それらの役割を歴史的に考察しており、盛岡通、末石冨太郎、広瀬博治は、大阪における堀川の水利用と水空間の歴史的変遷について考察し、佐藤道彦は、同様に大阪市における堀川の変遷と都市形成に果たした役割を考察している。また長弘雄次は、北九州市における堀川運河の変遷とその役割を歴史的に考察するとともに、その改修と保存再生について提言している。

9．河川処理（港湾整備）

河口港においては、港湾計画及び港湾機能の維持における洪水や流送土砂などへの対応といった河川処理が重要な課題であった。こうした視点から、松浦茂樹は、東京港築港と河川改修及び河川からの流出土砂との関係で研究しているほか、明治初頭の大阪港計画についても、流出土砂への対応を中心とした河川処理との関連において、ブラントン構想の評価を行っている。また内陸部の河川港湾については、笠松明男、金井萬造、長尾義三が、伏見港の生成・発展・衰退の歴史的経緯を明らかにするとともに、港湾整備が地域開発に及ぼした意義を歴史的に検証している。

10．河川舟運

河川舟運に関する歴史的な研究は、歴史学では丹治健蔵（「関東河川水運史の研究」法政大学出版局、1984）、川名登（「近世日本水運史の研究」雄山閣出版、1984）、日野照正（「畿内河川交通史の研究」吉川弘文館、1986）など、歴史地理学では小野寺淳（「近世河川絵図の研究」古今書院、1991）など、土木工学以外の分野において数多くなされている。

土木史研究では、佐藤馨一、五十嵐日出夫が、富士川における河川舟運の変遷とその衰退を低水工事から高水工事への転換及び陸上交通との関係で考察している。天野光三、前田泰敬、二十軒起夫は、淀川・大和川水系における舟運が果たした交通運輸上の役割とその変遷を報告している。

11．灌漑排水・農地開発

灌漑排水及び農地開発は、農業工学、農業経済学あるいは地理学などにおける研究分野であり、すでに限りなく数多くの研究業績が公表されている。例えば、農業土木学会によって「農業土木史」(1979) をはじめ木曽川 (1980)、淀川 (1983)、利根川 (1987) などの農業水利誌が編纂されており、学会創立60周年近似業として明治・大正期の文献が「農業土木古典選集」(2期全22巻) として復刻されている。そのほか、亀田隆之 (「日本古代用水史の研究」吉川弘文館、1973)、宝月圭吾 (「中世灌漑史の研究」畝傍書房、1943)、牧隆泰 (「日本水利施設進展の研究」土木雑誌社、1958)、菊池利夫 (「新田開発」古今書院、1977)、今村奈良臣、佐藤俊朗、志村博康、玉城哲、永田恵十郎、旗手勲など農業土木・農業経済の研究者による「土地改良百年史」(平凡社、1977)、さらに都道府県による土地改良史の編纂、土地改良区における事業史・改良区史の編纂なども行われている。

土木史研究においては、石﨑正和が、寛文期における水利開発の特徴について考察しているほか、梅野倫之、米川信之、徳永康則による通潤橋の機能と構造に関する考察、米谷民憲、清水浩志郎、折田仁典による田沢湖疏水トンネルの歴史的評価、坂本紘二、山下三平による電気灌漑事業に関する研究、伊藤芳昭、清水浩志郎、木村一裕による象潟温水路灌漑に関する考察、堀野一男による湧水を利用した水利開発に関する考察、伊藤芳昭、清水浩志郎、木村一裕による古穴堰に関する検討、藤田龍之らによる安積疏水におけるファン・ドールン及び山田寅吉に焦点を当てた研究などが行われてきた。

なお、多田博一は、イギリス東インド会社軍の工兵将校によって実施されたインドのガンガー用水路における用水路灌漑技術の確立課程を研究しており、この研究成果を含め、「インドの大地と水」(日本経済評論社、1992) として刊行されている。

12. 河川水力開発

わが国の河川水力発電は、流れ込み式発電によって、明治末期から大正期に至り、大きな発展を見る。その大正末期から貯水池式発電が可能になり、やがてダム建設技術の進歩とともに、大規模な水力発電が展開されるようになる。

土木史研究における河川水力開発については、唯一稲松敏夫によって、明治以降の現在に至るまで、電力土木に活躍した人物を含めて水系別に水力発電の変遷が報告されている。

「土木史研究」河川関係論文リスト (No.1～12、1981～1992)

1. 洪水・水害

1	高橋裕・古木守靖・安藤義久・田辺敏夫・前川忠生：東京都の台地部中小河川の水害特性に関する史的考察	01-12	1981
2	高橋裕・安藤義久・前川忠生・志村知昭：東京都の台地部中小河川の水害特性に関する史的考察 (第2報)	02-21	1982
3	山田啓一・田辺淳：千曲川における寛保2年(1742) 8月大洪水の考察	05-14	1985
4	山田啓一・片桐剛：千曲川における寛保2年(1742) 8月洪水の氾濫量の推定	07-29	1987
5	山田啓一：千曲川における寛保2年(1742)洪水の規模推定について	09-15	1989
6	寒川典昭・山下伊千造・南志郎：千曲川下流の歴史洪水の復元と考察	12-24	1992
7	品川守・山田正・豊田康嗣：石狩川の明治37年7月洪水における岡崎文吉の洪水量算定とその評価について	11-23	1991

2. 河道変遷

8	外川忠利・大熊孝：信濃川下流部における河道変遷に関する一考察	05-16	1985

9	中川武夫：加賀・手取川の流路変遷考	02-16	1982
3．水防			
10	小出崇：水戸市及び足利市の浄水場における洪水との戦い	05-07	1985
11	風間輝雄：江戸時代における水防の組織と態勢	05-20	1985
12	風間輝雄：近代における水防の組織と態勢	06-19	1986
13	風間輝雄：現代における水防の組織と態勢	08-24	1988
14	松浦茂樹：宇治川と宇治平等院	10-19	1990
4．伝統的河川水利工法			
15	松浦茂樹・山本晃一・浜口達男・本間久枝：水害防備林の変遷についての一研究	08-25	1988
16	石崎正和：蛇籠に関する歴史的考察	07-32	1987
17	大熊孝：霞堤の機能と語源に関する考察	07-33	1987
18	石崎正和：明治における在来技術の発展に関する研究	11-22	1991
19	石田正治：人造石工法（たたき）の遺産の調査とその保存	11-35	1991
5．河川処理思想・計画・技術（近世）			
20	澤田健吉・佐々木久：吉野川の歴史－土木工学的な立場で－	01-11	1981
21	澤田健吉・佐々木久：吉野川の歴史－庄屋・豪農の日記類における川成と普請の記録－	02-15	1982
22	澤田健吉：吉野川の歴史（その３）－藩の農村支配体制の面から見た勧農川除普請－	03-03	1983
23	澤田健吉：吉野川の歴史（その４）－農民の治水論から想像される当時の姿－	04-03	1984
24	澤田健吉：吉野川の歴史（その５）－徳島の地方新聞にみる明治年間の治水動勢－	05-21	1985
25	澤田健吉：吉野川の歴史（その６）－本流の治水工事と併行した周辺の治水と利水工事－	06-22	1986
26	澤田健吉：吉野川の歴史（その７）－古絵図によって組立てられた吉野川像－	07-31	1987
27	澤田健吉：吉野川の歴史（その８）－吉野川の治水に導入された労働量－	08-27	1988
28	澤田健吉：吉野川の歴史（その９）－まとめとしての史観－	09-11	1989
29	石崎正和：近世文書にみる水利技術の系譜	04-04	1984
30	石崎正和：近世文書にみる水利技術の系譜（その２）	05-19	1985
31	石崎正和：近世文書にみる堤高に関する研究	09-10	1989
32	知野泰明・大熊孝・石崎正和：近世文書に見る河川堤防の変遷に関する研究	09-14	1989
33	知野泰明：酒匂川にみる近世治水技術に関する研究－文命堤を中心に－	10-04	1990
34	知野泰明：徳川幕府法令と近世治水史料における治水技術に関する研究	11-05	1991
35	堀野一男：秋田藩における近世前記地方文書に示された水利技術とその思想	10-22	1990
36	堀野一男：『堤防溝洫志』に示された治水思想の特徴と河川環境論的位置づけ	11-21	1991
37	堀野一男：秋田藩における近世期史料からみた水利・治水技術と水環境論－秋田藩「川口町丁代文書」にみる普請対応を中心として－	12-27	1992
6．河川処理思想・計画・技術（近代・現代）			
38	石崎正和・宮村忠：民間治水論に関する考察	02-18	1982
39	松浦茂樹・山本晃一：近代黎明期における河川改修計画についての一考察－明治29年２月発表の斐伊川改修計画を具体的事例として－	02-19	1982
40	松浦茂樹：戦前の河水統制事業とその社会的背景	05-23	1985
41	松浦茂樹：治水長期計画の策定の経緯とその基本的考え方の変遷	06-20	1986

42	松浦茂樹：戦前の鴨川改修計画における環境面の配慮	07-35	1987
43	山村悦夫：河川環境と治水自然主義論	06-21	1986
44	許士達広・品川守・久米洋三：岡崎文吉の治水思想に関する考察	11-06	1991
45	石崎正和：わが国河川技術の近代化に関する考察	10-21	1990
46	知野泰明・大熊孝：お雇外国人技師R.H.ブラントンの信濃川河口調査に関する研究	11-40	1991
7．河川処理（地域開発）			
47	福成孝三・石黒勲：地域開発と治水利水計画ー児島湾北部の新田開発を中心としてー	01-14	1981
48	大熊孝：大河津分水と満願寺水門	02-17	1982
49	望月達也・小川淳一・鈴木栄：大河津分水の現状について	05-15	1985
50	山本廣次・眞下実：木曽三川と輪中について	02-14	1982
51	根橋直人：宝暦治水の回顧	07-30	1987
52	山本廣次：豊川の歴史	03-02	1983
53	中川武夫：加賀・梯川水系の歴史	06-23	1986
54	高橋彌：雁堤による富士川の治水と社会への影響ー雁堤と富士市ー	09-13	1989
55	高橋彌：富士川雁堤と徳川幕府初期の治水への影響	10-03	1990
56	松浦茂樹：河川からみた埼玉平野の開発ー古代から家康入国までー	11-07	1991
57	小林寿朗：中川流域の治水史	12-35	1992
8．河川処理（都市整備）			
58	盛岡通・末石冨太郎・広瀬博治：商工都市大阪の水利用と水空間の変容	01-13	1981
59	中川武夫・川本憲夫・古池久・石田郁喜：金沢城周辺の水系と水利	03-04	1983
60	佐藤道彦：大阪市における堀川の都市計画的意味	02-10	1982
61	長弘雄次：遠賀堀川の果たした役割と再生について	11-27	1991
62	昌子住江：明治初期の河岸地に関する制度と利用状況についてー東京・日本橋区を例としてー	07-05	1987
63	昌子住江：震災復興事業における河川・運河計画	09-22	1989
64	昌子住江：東京戦災復興計画の運河に関する考察ー墨田区および江東区を例としてー	10-12	1990
9．河川処理（港湾整備）			
65	松浦茂樹：東京港築港と河川改修との関わりについての研究ー河川からの流出土砂を中心課題としてー	01-19	1981
66	笠松明男・金井萬造・長尾義三：日本最大の河川港湾伏見港の生成と衰退	08-28	1988
67	松浦茂樹：明治初頭のブラントンによる大阪港整備計画	11-39	1991
10．河川舟運			
68	佐藤馨一・五十嵐日出夫：内陸水路交通の土木史的研究	01-10	1981
69	天野光三・前田泰敬・二十軒起夫：東大阪地域における河川と舟運について（その１）	06-12	1986
70	天野光三・前田泰敬・二十軒起夫：東大阪地域における河川と舟運について（その２）	07-27	1987
11．潅漑排水・農地開発			
71	梅野倫之・米川信之・徳永康則：通潤橋について	01-07	1981
72	米谷民憲・清水浩志郎・折田仁典：田沢湖疏水トンネルの歴史的評価	02-25	1982
73	坂本紘二・山下三平：水利の技術システムに関する研究ー「筑後川土地改良区」におけ		

	る自家発電による電気灌漑事業を事例として－	08-22	1988
74	伊藤芳昭・清水浩志郎・木村一裕：鳥海山北面水系における象潟温水路灌漑整備に関する史的考察	10-25	1990
75	石崎正和：水利開発史における寛文期に関する考察	06-18	1986
76	多田博一：インドにおける用水路灌漑技術の確立課程－ガンガー用水路建造を中心に－	08-23	1988
77	多田博一：インドにおける用水路灌漑技術の確立課程－ガンガー用水路の建造を中心に－（その２）	10-26	1990
78	堀野一男：寒風山からの湧水を利用した水利用開発事業－八郎潟南西部・鳥居長根地区への利水・開墾と渡部斧松－	08-21	1989
79	伊藤芳昭・清水浩志郎・木村一裕：幻の秋田藩鬼越峠古穴堰掘鑿に関する文献的検討	11-26	1991
80	須田熙・小林眞勝：野蒜築港と安積疎水の歴史的変遷－東北開発の先駆けとなった明治プロジェクト	09-19	1989
81	藤田龍之・根本博：猪苗代湖疏水（安積疏水）に関するファン・ドールンの業績に対する検討	11-24	1991
82	藤田龍之：猪苗代湖疏水（安積疏水）の設計における日本人技術者の役割－山田寅吉について－	12-25	1992

12. 河川水力開発

83	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷	02-20	1982
84	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その２）－	03-01	1983
85	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その３）－	04-05	1984
86	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その４）－	05-22	1985
87	稲松敏夫・有賀明：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その５）－	06-25	1986
88	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その６）－	07-34	1987
89	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その７）－	08-27	1988
90	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その８）－	09-12	1989
91	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その９）－	10-20	1990
92	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その10）－	11-25	1991
93	稲松敏夫：電力土木の歴史－各河川水力開発の変遷（その11）－	12-26	1992

13. その他

94	杉山和穂・笹谷康之・小柳武和：河川空間の利用に関する土木地誌－茨城県十王川を例に－	07-36	1987
95	中川武夫：加賀・梯川の水と小松天満宮とのかかわりに関する史的考察	08-26	1988